

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：30116

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04435

研究課題名(和文) 発達段階を考慮した居場所づくりによる「不登校回復プロセス」のモデル化

研究課題名(英文) Modeling of the "Recovery process from school refusal" in a facility that creates a place to stay according to the developmental stage

研究代表者

高野 創子 (Takano, Tsukumi)

札幌国際大学・人文学部・准教授

研究者番号：00746589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、不登校状態にある子どもたちを支援する様々な領域における施設のスタッフを対象にしたグループインタビューを通して、回復の概念と回復プロセスをモデル化することであった。民間施設の支援においては対人関係の構築を回復の鍵とし、仲間関係の形成や人とのつながりを促すことに共通点があった。回復過程では、信頼できる大人との出会いや関わりを通して、徐々に同年代の仲間とつながり、再び仲間関係を築いていく様子が語られた点で共通していた。義務教育年限期間を終了した社会から引きこもる若者支援を行う施設についても同様の手法で調査を行ったところ、共通した支援の特徴と回復過程が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

義務教育年限にある不登校状態の子どもたちの特徴に留まらず、就労支援を標榜する若者支援においても同様の支援特徴と回復経過が見られたことが本研究の興味深い成果であったと言える。すなわち、不登校を「教育の問題」として捉えるのではなく同年代の仲間のなかでの「居場所」の喪失、あるいは「居場所」からの撤退と捉える社会的視点が支援の鍵となるのではないだろうか。そのため学校の内外に捉われずに再び同年代の仲間の中に「居場所」を見出すことが不登校の状態にある子どもたちの支援となりうること、そしてそれを回復と捉える視点を提言する点において本研究には社会的意義があると考えている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to model the concept of recovery and its recovery process through group interviews with facility staff in various areas that support children who are not attending school. In supporting private facilities, building interpersonal relationships was the key to recovery, and there was a common point in promoting the formation of peer relationships and connections with people. In the recovery process, they shared that they gradually connected with peers of the same age through encounters and relationships with trusted adults, and how they re-established friendships. When the same method was used to investigate institutions that support young people who withdraw from society after completing the compulsory education period, common features of support and recovery processes were suggested.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不登校 仲間関係 回復プロセス 教育 福祉・コミュニティ 医療 若者支援

1. 研究開始当初の背景

文部科学省の調査によると 2001 年にピークに達した不登校児童生徒数は、2014 年にはおよそ 12 万人に達し、依然として増加傾向を示している。学校は、勉強以外にも社会性を身に着けるための場として様々な人と出会い、学び、成長する機会を提供している。しかし、実際には学校に「居場所」を見出せずに不登校状態となり、同年代の子どもたちを恐れ、家庭に引きこもらざるを得ない子どもたちが数多く存在する。すなわち、仲間関係の中で成長する機会を失った子どもたちが不登校の数だけ存在するということになる。

しかし一度は不登校となり、仲間の中での「居場所」を失った経験を持つ子どもたちの中にも、再び仲間関係の中で成長の機会を見出し、前に進むことのできる者も多い。中学 3 年生のときに不登校状態とみなされた生徒を対象に文部科学省が行った 5 年後 (20 歳時点) の追跡調査では、8 割が就学・就業の状態にあることが示されている。それでは一度は学校という場で「居場所」を失った子どもたちが、再び、あるいは新たな仲間関係の中に自分の「居場所」を見だし、回復するには一体どのようなプロセスを辿るのであろうか。

1992 年に文部省による報告書「登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—」が発表されたことを受け、学校はもちろんのこと民間の NPO 団体、医療機関など、学校の内外で多くの実践的な取り組みが行われてきた。特に民間団体が提供する「居場所」は学校教育の縛りに捉われずに独創的な活動を展開している。それらの活動は個別対応にとどまらず、同年代の仲間関係を提供する「居場所」として共通点が見出せる。例えば、緩やかなペースの小集団活動を通して、自己信頼感や自信、集団で活動する楽しさなどを取り戻すためのプログラムを提供し、不登校のために絶たれた同年代の対人関係を補う機能を果たしていると考えられる。

2. 研究の目的

上記の視点から私たちの研究チームは「不登校」を同年代の仲間のなかでの「居場所」の喪失、あるいは「居場所」からの撤退と捉え、学校の内外に捉われずに再び同年代の仲間の中に「居場所」を見出すことを不登校からの回復と捉えている。それでは、不登校児を支援する医療、教育、福祉など様々な分野の施設の支援スタッフはどのような構造と関わりの中で何を不登校からの回復とみなし支援にあたっているのだろうか。それぞれの領域に関する支援施設の回復プロセスを明らかにし、モデル化することを本研究の目的の大きな柱とした。

調査 1 : 学校内外で不登校状態にある児童生徒に「居場所」を提供する全国各所の施設・団体のスタッフを対象に、不登校からの「回復」の概念とその回復プロセスを聴取し、そのモデル化を試みた。また教育、医療、福祉の領域による支援の方法論の違いが回復プロセスにどう影響するか、それぞれの分野の支援に関する特徴についても検討を行うこととした。

調査 2 : 「心理的機能を果たす『居場所』に関する構造は、発達段階に応じて変化する (杉本・庄司, 2006)」ことを受け、義務教育年限を終了した高校生年代以上の若者を対象とした支援施設に同様の調査を行い、回復プロセスの発達の違い、または共通点について検討を行なうこととした。

3. 研究の方法

学校内外で「居場所」を提供する全国各所の施設・団体のスタッフを対象に、フォーカス・グループ・インタビュー (Vaughn, 1996) の手法に則ったフィールド調査を実施した。調査 1 では、教育分野 2 施設、福祉分野 1 施設、医療分野 1 施設について調査を行った。また調査 2 については、新型コロナウイルスの感染拡大と予算的な都合で教育分野 1 施設、福祉分野 1 施設に留まった。それぞれの施設に所属する支援スタッフのグループに対して、①施設の構造や特徴、②施設の支援を通して回復したと思われる典型事例について紹介してもらい、③この施設で回復が意味するところについて尋ねる半構造化面接を行った。インタビューは 1 時間から 1 時間半の間で行われ、その内容から逐語記録を作成し、研究目的に関する内容を抽出し、研究者 3 名による討議によってコード化・カテゴリーの生成を行ない、回復プロセスのモデルを作成した。なお、調査実施については札幌国際大学の倫理委員会の認可を得た。

4. 研究成果

(1) 調査 1 : それぞれの施設 (領域) における支援の特徴と回復概念、そのプロセスについて

【教育領域 : フリースクール (以下 FS と記載)】

小学高学年から中学生が通う FS のスタッフを対象に実施した調査の典型事例は在籍校での対

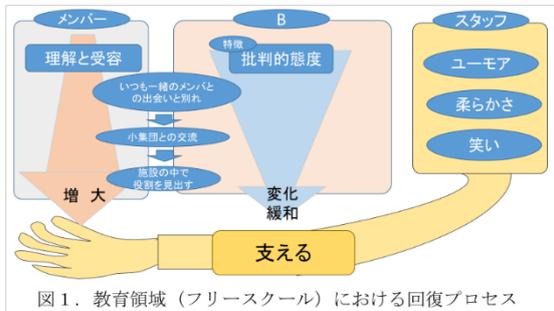


図1. 教育領域（フリースクール）における回復プロセス

の抱える問題が再燃され、そこからいかにして新しい対人関係を作っていくかが課題となる様子が語られた。授業は単なる学業の補償としてではなく、普段話していない人とも話することができる合理的な場となったり、同じ時間を共有したりする関係づくりを促す枠組みとして意図的に用いられていることに特徴があった。

【教育領域：公立中学校】

一定の条件で不登校児童生徒を受け入れる公立中学校の教員のグループを対象に同様の調査を行なったが、教育課程や生徒指導などの教育機会を自己表現の機会としてとらえていることと、回復の転機となるポイントについては触れられたものの、グループ内で一つ事例を共有することができなかつた。回復の位置づけについても教員によって異なり、回復過程のモデル図を作成することがかなわなかつた。縦割り学級を採用しており、人とつながることを目指す構造をもつ点については上述のフリースクールと共通している点ではあるが、個々の教師 - 生徒間での支援に関する語りを中心となり、同世代の仲間関係を意識した支援に関する話題には至らなかつた。教育行政に縛られる形での支援構造や教育課程上の「卒業」というゴールが明確に位置づけられている点において、自由度の高い民間の支援団体とは支援方法や回復の観点に違いが生じることが推測された。

【医療領域：精神科デイケア（以下DCと記載）】

乳幼児から高齢者までが通院する多機能型精神科クリニック内に開設された小・中学生の児童生徒が通うフリースクールと呼ばれるDCに従事するスタッフを対象とした。典型事例は、就学前より当該クリニックで発達支援を受けていた子どもが、就学したものの程なく不登校になり通所したものであった。外来クリニックでの心理士との個別心理療法の中で、二者関係以上の対人関係の必要性が感じられたタイミングで、DC通所を開始するが、来所当時は施設内へ入ることさえも困難を示し、特定のスタッフにしがみつき、他児とのかかわりはもちろんのこと、プログラムへの参加も拒否していた。数か月経過したところで、他児メンバーが声をかけてくれたことを契機にスタッフを伴いながら少しずつプログラムに参加するようになった。その後、徐々に人間関係を広げていき、仲間同士でのトラブルでは、スタッフが介入する中で互いに気持ちをぶつけあう経験を積み、成長していくプロセスが語られた（図2）。スタッフにとっての回復とは、原籍校への再登校を目指すよりも、人とつながりがもたらす安心感や存在感を実感することを「回復」としていることが語られた。本DCにおいて取り扱われる不登校の問題は、仲間関係での傷つきによる撤退によって生じる現象というよりも、むしろ仲間関係の構築以前の段階でのつまづきにあり、家族の養育能力

人間関係からのドロップアウトを特徴としていた。通所当初は周囲に批判的態度を示し、時にFSの活動への参加を拒否する子どもがスタッフとの情緒的なサポートをベースに仲間関係を築いていく経過が語られた（図1）。スタッフにとって回復とは、仲間関係の中で「批判的見方が和らぐこと」「年齢相応の悩みを持つこと」のような変化を意味し、それを「成長すること」と表現した。本FSでは原籍校での仲間関係のドロップアウトと関連するそれぞれの子ども

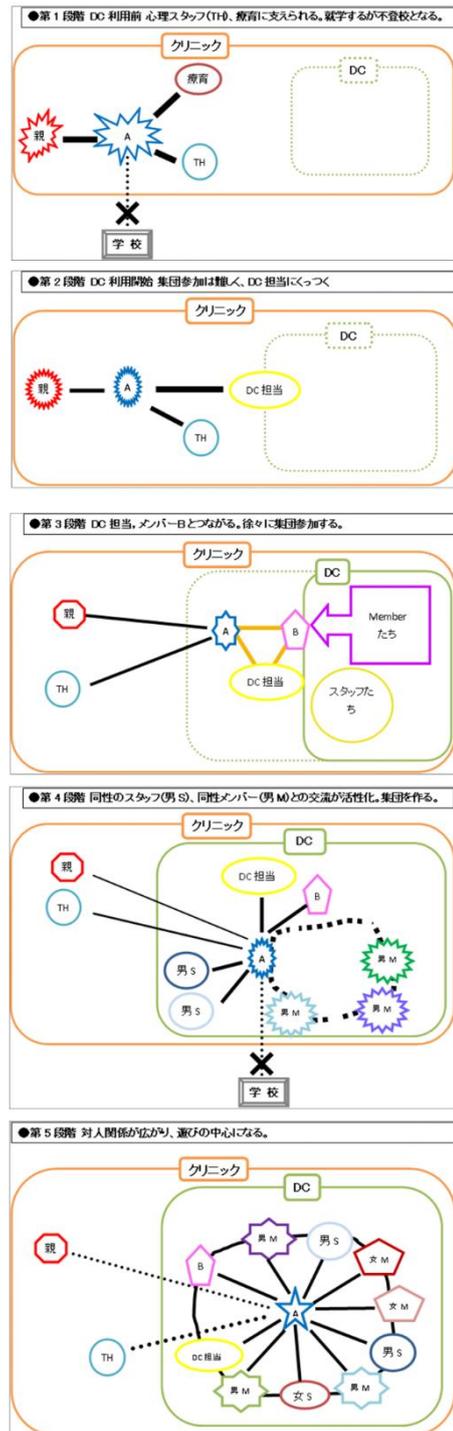


図2. 医療領域（デイケア）における回復プロセス

の脆弱性、または子どもの発達の、病理的問題に焦点が当てられていた。スタッフとの二者関係、つまり大人との信頼関係の形成に慎重に時間をかけていく過程を通して、スタッフを安全基地とし、特定の子どもと出会い、仲間関係の構築へと時間をかけて根気強く展開させていく経過は、年齢や発達期を越えて社会とのつながりの構築と維持を目指す医療的支援の特徴の一つであると考えられた。



図3. 福祉領域（フリースクール）における回復プロセス

【福祉領域：フリースクール（以下FSと記載）】

ライフサイクルを見通した継続的支援を標榜し、未就学児から30歳程までの来所者が通うFSのスタッフたちが挙げた典型事例は、小規模校から大規模校への進学を契機に不登校となったケースであった。親に連れられてきた当初は、反応も少なく心を閉ざしていたが、本人が得意とするプログラムの中で、スタッフと一対一の形で交流することで、徐々に笑顔を見せるようになる時期（第一段階）に並行して、環境調整として心理専門スタッフによる保護者への子ども理解に向けた支援が実施された（第二段階）。その後、スタッフが「デトックス期」と呼ぶ、自己表現としてコントロールし難い自己の傷つき体験をスタッフにぶつけ、受け止められることを通して、徐々にコントロールを獲得する過程（第三段階）が語られた。そうした自己表現のコントロールが行えるようになった時期に気の合う仲間との出会いがあり、互いに元気になる関係を築けるようになったところ（第四段階）で、地域の高齢者との関わり等を経験して、ケアされる側からケアする側へと成長する姿（第五段階）が語られた（図3）。本施設にとって回復とは、孤立した子どもが、人との関わりの中で癒され、元気を取り戻し、再び「つながり」の中で生きる発達の機会を取り戻すことにあると示唆された。子どもには生まれながらに「主体性」が保証されるべきという立場から、不登校とは、保護者や学校、つまりは「大人」や「社会」によって、主体性を奪われる体験をし、傷ついた子どもの「SOS」の表れのひとつとみなしている点に特徴があった。そのため、安心が保障される関係の中で大人たちに向けて自身の傷つきを表現できる居場所の必要性を強調しており、この自己表現の時期を経てこそ、同世代の仲間と良い関係を築くことが可能となつた。さらには地域の大人たちとの出会いを通じて、主体性の健全な発露のモデルの獲得を目標に支援を行うことに特徴があった。

（2）調査2：義務教育年限以降の若者支援の特徴と回復概念、そのプロセスについて

【教育領域：通信制・単位制私立高校】

民間の通信制・単位制私立高校の教員たちを対象に、調査1と同様の手法を用いてインタビュー調査を行った。生徒自身の登校に向かう意欲・体力や、人とのつながりを求める程度の違いに応じて、登校日数、学習スタイル（個別／集団）、ホームルームや行事の参加頻度について選択できる構造を整え、生徒が「登校」を成功体験とし、自信をつけるねらいが語られた。また、職員室を校舎入口に置く等、教師と生徒の関わりを重視していた。生徒間の関係づくりでは、ホームルームや行事を利用して支援する様子が語られたが、あくまで生徒個人の意味に任せ「無理強いはいらない」としていた。しかし卒業後の社会適応という点では、教員とのかかわりより友人との関係を作れた者の方がよい印象があるとの語りが聞かれた。教育領域での不登校児支援との決定的な違いは、通信制高校が「進路」として選択された点にあり、学校体験のやり直しとドロップアウト体験の修正を期待する若者に、その機会を提供している点にあった。また教員-生徒の関係づくりに対して、生徒間の関係づくりは生徒次第、個々の教員の裁量任せの面が強かった点は、調査1における教育領域での公立中学校の結果と重なる。同様に回復となる転機や回復の位置づけについては語られるものの教員によってとらえ方は異なり、回復過程のモデル図を作成することがかなわなかった点でも同様の結果となった。

【福祉領域：自立・就労支援施設】

10代後半から40代前半までを対象とする若者の自立・就労支援を標榜するNPO法人に従事するスタッフを対象に行った調査では、回復の典型事例に基づいて、対象者が社会内での所属感を獲得することで元気になっていく過程について語られた。本施設では複数の就労支援プログラ

ムが用意され、利用者の状態やニーズに合わせた支援が提供できるように工夫されていた。また就労訓練プログラムの中で「時間を守る」「挨拶をする」「ハウレンソウ」などの社会的スキルを学んでいくが、これらは全て他者とのかかわりに向けた支援として位置付けられており、他者とかかわりをもちながら活動ができるようになることを目指していた。さらには休日といったプログラムの時間外でもスタッフが架け橋となって、メンバーで集まり遊びに行ったり、夕日を眺めに行ったりするなど、仲間と出会い、つなぐ支援（「青春のやり直し」）を積極的に行っていた。スタッフは支援の終了を「卒業」と呼び、卒業後のフォローとして利用経験者の居場所が準備され、誰かと、もしくはどこかとつながり続けることを自立支援の重要な鍵とみなしていた。回復の概念については、「就労先だけでなく他機関につながる」「3ヶ月働き続けること」「社会的所属感の獲得」「ここを頼らなくなること」「次の進路先でも相談できること」などその表現は個々のスタッフによって異なっていたものの、「つながり続けること」が可能となることが支援終了の共通した目安であった。

(3) 本研究のまとめ

義務教育年限に不登校状態にある子どもたちを支援する民間のフリースクールやデイケアに共通する支援は、対人関係の構築を回復の鍵とし、仲間関係の形成や人とのつながりを促す支援が特徴的であった。またその回復過程においては、信頼できる大人との出会いやかかわりを通じて、徐々に同年代の仲間とのかかわりに繋がっていく経過が語られ、再び仲間関係を築くことができるようになったところで、それぞれが次の進路を見いだして進んで行く様子が語られた点で共通していた。こうした支援や回復過程の特徴は、義務教育年限にある不登校状態の子どもたちの特徴に留まらず、就労支援を標榜する若者支援においても同様の支援特徴と回復経過が見られたことが本研究の興味深い成果であったと言えよう。

一方で、発達段階（小中学生・高校生）に限らず、公立中学校、私立通信制高校では、同世代の仲間関係の構築を意識した支援が構造としてはあるものの、具体的なかかわりを通じた支援に関する語りの中では「教師と生徒の関係」や「教科科目での自己表現」など、学校内での個人の変化に焦点付けた支援、すなわち教育課程に位置づけられる支援が中心に語られる傾向にあったと言える。

今回の研究においては「不登校」を同年代の仲間のなかでの「居場所」の喪失、あるいは「居場所」からの撤退と捉え、学校の内外に捉われずに再び同年代の仲間の中に「居場所」を見出すことが不登校の状態にある子どもたちの支援となりうるというスタンスで調査を開始した。そのため、教育領域の中でも特に学校教育施設では、「不登校」の支援において在籍年限や教師として支援対象者と関与できる範囲などの制約が明確で強固に存在するため、社会との接続にかかわり支援対象者のその後の適応についてのサポートやフィードバックを実施しがたい構造を持つことが改めて、本調査の限界としても立ちはだかることとなった。

今回の調査では、支援対象者である子どもや若者のプライバシーに配慮するなどの倫理的な制約から、あくまでも支援者を対象として行なった。今後、こうした支援者からの視点に関する調査を積み重ねていくことの重要性はもちろんであるが、こうした回復の概念や回復のプロセスが、当事者である子どもや若者の側からはどう見えるかについて今回の結果と照らし合わせて確認していくことが課題になると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 木下弘基・高野創子・平野直己 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 不登校児の支援施設における回復プロセス（1）フリースクールでのグループインタビューの検討 Recovery process in support facilities for absentee students (1): An examination through group interviews conducted at a Free (alternative) School. | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 思春期青年期精神医学 | 6. 最初と最後の頁 p122-123 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 高野創子・木下弘基・平野直己 | 4. 巻 29 |
| 2. 論文標題 不登校児の支援施設における「回復」について：教育領域の支援者のグループインタビューから On “recovery” in support facilities for absentee students : An examination through a group interview of supporters at an educational field. | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 思春期青年期精神医学 | 6. 最初と最後の頁 p123-124 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 木下弘基 高野創子 平野直己 |
| 2. 発表標題 不登校児の支援施設における回復プロセス（1）フリースクールでのグループインタビューの検討 Recovery process in support facilities for absentee students (1) : An examination through group interviews conducted at a Free (alternative) School. |
| 3. 学会等名 日本思春期青年期精神医学会/国際思春期青年期精神医学（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 木下弘基・高野創子・平野直己 |
| 2. 発表標題 .様々な領域での不登校児の支援施設における回復過程（2）-ある精神科デイケアのグループインタビュー- |
| 3. 学会等名 日本心理臨床学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高野創子・木下弘基・平野直己 |
| 2. 発表標題 .様々な領域での不登校児の支援施設における回復過程(3) -あるコミュニティ・福祉領域のグループ・インタビュー- |
| 3. 学会等名 日本心理臨床学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 高野創子・木下弘基・平野直己 |
| 2. 発表標題 不登校児の支援施設における「回復」について：教育領域の支援者のグループインタビューから On “recovery” in support facilities for absentee students : An examination through a group interview of supporters at an educational field. |
| 3. 学会等名 日本思春期青年期精神医学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 高野創子・木下弘基・平野直己 |
| 2. 発表標題 若者支援施設における「支援」が目指すもの |
| 3. 学会等名 日本心理臨床学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高野創子・木下弘基・平野直己 |
| 2. 発表標題 不登校経験者への支援施設による支援について：通信制高校教師へのグループインタビューから A case study of support facility for adolescents who experienced absenteeism from school : Through a group interview of correspondence high school teachers. |
| 3. 学会等名 日本思春期青年期精神医学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 益子洋人・平野直己・木下弘基・高野創子 他32人 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 明石書店 | 5. 総ページ数 264 |
| 3. 書名 ガイドブック あつまれ！ みんなで取り組む教育相談 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|------------------------------------|----|
| 研究 分担者 | 平野 直己 (Hirano Naoki) (80281864) | 北海道教育大学・教育学部・教授 (10102) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|--------------------------------------|----|
| 研究 協力者 | 木下 弘基 (Kinoshita Koki) (50910642) | 北海道情報大学・医療情報学部・講師 (30115) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|